

# ACCESSIBLE DESIGN

The Periodical of

## アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル No. 51

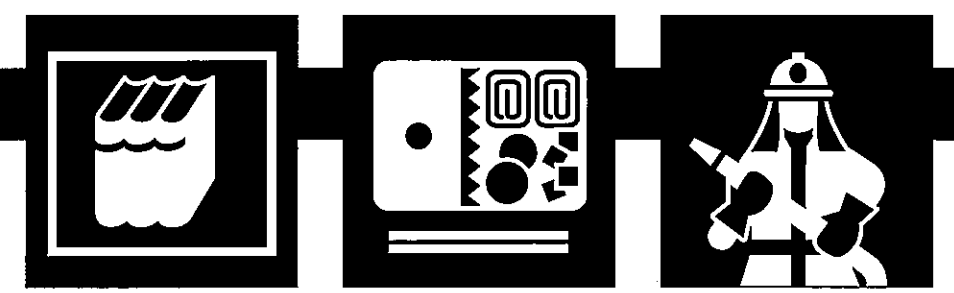
2007 (平成19) 年11月25日

No. 51

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)  
共生社会の実現を願う妖精「インクル」 「包括的教育理念」を意味する英語「インクルージョン」から名付けました

### 目次 / contents

- 広がる「バリアフリーサービス」推進の取り組み  
「トミカ博」と「サントリーホール」でスタッフ研修(久米井靖裕、和田留真理) …… 2
- 「サイトワールド2007」、機構が独自ブースを出展 (高嶋健夫) …… 5
- <速報>日中韓3カ国提案、ISOで本格審議がスタート (水野由紀子) …… 6
- 「DPI世界会議」韓国で開催、機構が日本のAD製品を展示 (米井健治郎) …… 7
- 共用品推進機構でインターンシップ研修  
夏休みに大学生と高校生が「就業体験」(森川美和)  
「就業体験を通じて」(大窪結香・郡山遙) …… 8  
「インターンシップを通じて」(吉田亜沙美・鹿山かの子) …… 9
- 「第34回国際福祉機器展 (HCR2007)」ルポ  
「高品位バリアフリー」を追求、大手はトータルソリューション競う (高嶋健夫) …… 10
- <特別インタビュー>李鎬崇・慶星大学校UD研究センター長に聞く  
韓国で唯一のUD専門機関、「高齢親和産業」を育成 (星川安之、高嶋健夫) …… 11
- 共用品ネット活動報告会「共用品を考える2007」開催 (吉村政昭、高嶋健夫) …… 13
- <この業界・この団体> (社福) 全日本手をつなぐ育成会  
知的障害のある人の「当事者参加」を推進 (高嶋健夫) …… 14
- <事務局長だより>あの名、この顔、出会いと感謝の28年 (星川安之)  
共用品通信 …… 15
- <わが社のエース>キヤノン(株) 複合機「imageRUNNER」シリーズ  
音声による「ガイド&操作」を実現 (高嶋健夫)  
奥付 …… 16



■「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T0103)」に収録されている絵記号例。左から「図書館」「お弁当」「消防士」(共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます)

# 広がる「バリアフリーサービス」推進の取り組み 「トミカ博」も「サントリーホール」もスタッフ研修

障害のある人も、ない人も、誰もが楽しめるイベント開催を目指して「バリアフリーサービス」の充実に取り組んでいる。前号で紹介した「神保町シアタービル」に引き続き、「トミカ博 in TOKYO」でも「サントリーホール」でもスタッフ研修を実施した。そこで、(株)タカラトミーワールド企画グループの久米井靖裕氏、サントリー(株)C-S-R推進本部お客様コミュニケーション部マーケティングサポートセンターの和田留理氏にそれぞれの研修の狙いや内容について、ご質問いただいた。

## 〈トミカ博 in TOKYO〉

### 「知ること」で「できること」を探る

「トミカ博」とは、タカラトミーが販売しているミニカー「トミカ」の大規模イベント。毎年夏に開催し、正式名称は「トミカ博 in TOKYO」。今年は8月23日～9月2日の11日間、池袋サンシャインシティ・ワールドインポートマート4階で開催しました。

イベント会場内は大きく分けると、入り口から「見る・知る(展示ゾーン)」「遊ぶ(アトラクションゾーン)」「買う(ショッピングゾーン)」の3つのゾーンで構成されています。来場者は3～5歳の男の子とその家族が中心で、今年は9万1231人が来場してくださりました。会期中には、何組かの障害のあるお客様が来場します。その際には、①運営スタッフが必ず本部へ連絡する、②お声がけをする、③ご要望があればお聞きする——などの基本的な対応をマニュアル書に記載していますが、それ以上の規定はなく、その場その場で何とか対応していたのが実情です。

今年のゴールデンウィークに「プラレール博」を開催しましたが、会期終了後にお客様サービス部門へ、クレームの連絡がありました。「来場してプラレール釣りのアトラクシ

ョンに参加したが、車両の色が識別できず、何を釣ったのかわからなかった。障害のある人にとっても不親切だ」という内容でした。お客様が名前や住所を告げずに電話を切られたために、どのような状態で不自由を感じられたのか十分に調べることはできませんでしたが、はっきりわかったのは「不自由を感じているお客様がいらっしゃる」という事実です。

### きっかけは「色がわからない」とのクレーム

そこでまず、色の識別が困難な方がどのような不便を感じるのか、共用品推進機構の星川安之専務理事に教えてもらうことにしました。そして今後、障害のある方への対応をどうすればよいのか、何度か相談させていただいていました。

そんな時、小学館さんと吉本興業さんが運営する「神保町シアタービル」でバリアフリーサービス研修が実施されると聞き、無理をお願いして見せていただきました。短い時間でしたが、多くのことを勉強させていただきました。「これくらい」と思う傾斜が、いかに車いすを使用される方にとって大変か。障害がないように見えても聴覚障害がある方には、緊急放送が聞こえないなど、現場で教えてもらえるからこそストレートに伝わってき

ました。また、この研修を企画・実施された(株)アサツーディ・ケイ(ADK)の浅和一雄さんとシアターのスタッフの皆さんの真剣なやり取りにも心を動かされました。

「トミカ博でも研修をして、運営スタッフとバリアフリーに対する共通体験を持ちたい」と素直に思いました。

### 運営・制作・施工担当ら50人以上が参加

トミカ博でバリアフリー研修を実施したいことを運営スタッフに伝えましたが、その真意を伝えるのに苦労しました。自分がそうであったように、頭では何かをしなければと思いつつも、その活動には余分な手間や費用がかかる、できるだけ避けて通りたいというのが本音だからです。

そこで、みんなに話したのは「今回の研修は、悪いところを指摘してもらい、すぐに改善するのが目的ではない。まずは障害のある方がどのようなところに不便を感じるのか知ることなのです。それから、できることから始めましょう」ということでした。

研修は、3部構成で行うことにしました。まずは講師の皆さんに実際に会場内で遊んでいただき、会場内の作りやスタッフの対応を視察してもらう。その後、別会場で障害のある方への一般的な対応についての座学を実施する。最後に、もう一度会場内に戻り、それぞれのコーナーごとに、講師の皆さんが気づ

いたことを話してもらいながら質疑応答していくというスケジュールです。

研修は、強制参加にはしませんでした。運営スタッフをはじめ、企画制作関係者や施工担当者など総勢50名以上が参加してくれました。参加したメンバーは、私が「神保町シアタービル」で感じたのと同じように「知ること」で「できること」がたくさんあることを理解してくれたようです。この共通体験が、今後バリアフリーの対応を行う際に重要なことだと思っています。

その後の会期中に、視覚障害のあるご夫婦とお子様2人の家族が来場されました。比較的空いている時間帯でもあり、事務局スタッフが付き添って案内させていただきました。後で、そのご夫婦は講師をしていただいた方の友人で「とても楽しかった」とメールしてくれたと、星川専務理事から聞きとても嬉しく思いました。楽しんでもらったのは、障害のある方への対応の仕方を学んだからではなく、障害のある方の気持ちを少しでも理解して、楽しんでいただきたいという気持ちがあったからだと思っています。

(株)タカラトミー・久米井靖裕

## 〈サントリーホール〉

### 全面改装に併せ、ソフトサービスも充実

サントリーホールは開館20周年を機に全館改装し、9月1日にリニューアルオープンし



■「トミカ博」会場での研修風景。講師陣とスタッフが実地で課題などを討議



■サントリーホールでの研修風景。パネル討議形式の座学（左）とホール内での実地研修（右2点）

ました。車いすで正面玄関から入れるように、ロビー（ロビー）にスロープやリフトを新設し、2006席の大ホールは車いす席を増やし、従来の端席だけではなく、中央の良い席など最大18席を利用いただけます。客席が180度回転して車いすから乗り移れる「電動昇降回転いす席」や「ひじ掛けを開閉できる客席」を開発・導入したことで、ヴィンヤード型の大ホール（階段状のおどろ畑のような客席）のいろいろな位置から鑑賞できるようになりました。

改修によりハード面の設備は充実しましたが、「さすがサントリーホール」と喜んでいただくには、お客様をお迎えするスタッフが障害について理解し、接客・サービスのソフト面で「バリアフリーサービス」を実践できるように対応方法やマナーを学ぶべきであると考え、研修会を行うことにしました。

研修にはサントリーホールの運営スタッフおよび関係者約130名が参加。「ブルーローズ」（青いバラ）の名を冠した小ホールで講師の紹介も兼ねた座学を行った後、お客様エリアでの実地研修、まとめと質疑応答、という3部構成で行いました。

講師には高橋秀子<sup>たかはしひでこ</sup>さん（INAX勤務、電動車いす利用）、三浦稔<sup>みうらみのる</sup>さん（新宿トライ工房勤務、自走車いす利用）、河相富貴子<sup>かわいとつきこ</sup>さん（お琴演奏家・指導者、全盲）、高嶋健夫<sup>たかしまたけお</sup>さん（本誌編集長、弱視）、信井洋子<sup>のいようこ</sup>さん（手話通訳士）

の5名を迎え、研修の企画・進行を2005年愛・地球博日本館バリアフリーサービス運営責任者を務めて経験豊かな浅和一雄<sup>あさひひと</sup>さん（アサデー・ケイ勤務）に依頼しました。

### 多様なニーズに応える細やかな対応・マナー

実地研修では参加者約130名に声が届くように可動式マイクを使用。チケット売場、ギフトショップ、クロック、ドリンクコーナー、トイレなどお客様エリアの要所12カ所で、各講師から対応方法やマナーなどきめ細かいアドバイスを数多くいただきました。

例えば、ギフトショップでは、視覚障害のお客様とお金のやりとりをする時には、声を出して紙幣・硬貨の種別確認をしながら手渡しすること。また、移動をサポートする時には、階段を好まれる方、スロープを好まれる方、様々いらっしゃるの、お客様の要望を確認してから誘導すること。

ドリンクコーナーでは、聴覚・言語障害のお客様がメニューにどんな飲み物があるか聞かなくてもわかるように、あらかじめ印刷した写真付きメニューを用意しておく。そうすれば、指で指して注文できるということ。

混雑するクロックでは、車いす利用のお客様が容易に荷物の授受ができるように工夫すること。スタッフが外に出て対応したり、車いすの移動に不便のない位置で受け渡しをしたりすること。肢体不自由といっても障害の

## 「サイトワールド2007」開催 機構も独自ブースで共用品を展示

視覚障害者のための総合イベント「サイトワールド2007」（(社)日本盲人福祉委員会主催）が11月2～4日の3日間、東京・錦糸町の「すみだ産業会館サンライズホール」（丸井錦糸町店8階）で開催された。今年で2回目となる同イベントに(財)共用品推進機構も初めて独自ブースを出展し、シャンプー容器の「ギザギザ」や牛乳パックの「切り欠き」など、視覚障害者にもわかりやす



■連日賑わった「サイトワールド」の会場

状況は様々なので、個々の要求に即したサポートが望まれ、ひと声かけて確認することがとても大切であること、などなど。

### 「大切なのは心の通い合い」

最後に参加者の感想を紹介します。

「講師の方々の率直な意見を聞いてとても勉強になりました。我々の目線だけでは気づかなかったことが浮きあがってきました」

「障害のある方のお話をうかがえて新しい発見があり、大変参考になりました。特に聴覚障害の方への接し方を初めて考えました」

「具体的でわかりやすい研修で勉強になりました。自分自身の行動や対応を見つめ直す良い機会になりました。この研修を実際に活かすように頑張ります」

「座学・実学共に障害のある先生方の『生



■多数のAD製品を紹介した機構ブース

い配慮や工夫のあるアクセシブルデザイン商品を展示した。

今回の出品者は54の企業・団体で、機構のほか、(福)日本点字図書館、(社)視覚障害者支援総合センター、筑波技術大学、サンエ、東京電力、TOTO、日本IBM、松下電器産業、NTTドコモ、シナノケンシ、アメディアなどが軒を並べ、前回はやや下回ったものの、3日間で約6500人が来場、熱気あふれるイベントとなった。

たかしまたけお  
(高嶋健夫)

の声を聞くことができ本当に良かった。『やりすぎはいけない』こともわかりました。大切なことは、心の通い合い、人間味のある温かなコミュニケーションだと思います。そうした気持ちを全員が持てるように頑張ります」

今回の研修を通じて、参加者の多くから「非常に役に立つ」という高い評価をいただきました。今まで気づかなかった視点、驚き、発見が「バリアフリーサービス」の実践に活かされていくことを確信しました。

(サントリー(株)・和田留真理)

### ■ホームページ

(株)タカラトミー <http://www.takaratomy.co.jp/>

サントリーホール <http://www.suntory.co.jp/suntoryhall/>

## <速報>日中韓3カ国によるAD規格提案 ISO、10月から本格審議をスタート

日中韓3カ国が共同で国際標準化機構(ISO)に提案したアクセシブルデザイン(AD)関連の規格案の審議が、10月下旬にタイ王国の首都バンコクで開催された専門委員会でも本格的にスタートした。この新規規格案は日本工業規格(JIS)になっているもので、今年はじめに国際規格化が共同提案され、アジア諸国のサポートもあり、4月に締め切られた投票の結果、5件すべてが無事に新作業項目として承認されるに至った。

### 「凸表示」は新設WGで審議

今回審議されたのは、提案した5件のうち、人間工学の専門委員会「TC159」の作業範囲に属する4件。このうちの3件(報知音関連2件と年代別相対輝度関連1件)は既存の分科委員会「SC5」の作業グループ「WG5」において、残り1件(消費生活製品の凸表示)は新設の「SC4/WG10」においてそれぞれ審議に付された。

「SC5/WG5」の審議は同月22日午後と23日午前に行われた。このWGでは他の案件に関する議論と併せて、これらAD関連規格案3件が審議された。まず、日本から規格案の趣旨説明がなされ、その後、規格案の内容が具体的に検討された。

同様に、「SC4/WG10」の審議は23日午後から24日の2日間行われた。会議の冒頭で、提案についての経緯、趣旨を日本代表が説明し、各国代表からは規格案の内容について建設的な意見交換がなされた。同WGは新設ということもあり、グループとしての作業範囲や将来の作業案などについても活発な議論が行われた。

いずれの審議でも、綿密に準備された日本



■バンコクで開かれたISOのTC159分科委員会

からの説明が、各国代表に強い印象を与えたように思われる。

### 次回は、来年3月に中国で開催

ISOにおける初のAD関連規格案の審議をタイ王国規格協会(TISI)のホストにより開催できたことは、次の2点から有意義であった。すなわち、①今回の新規提案は日中韓の共同提案ではあるが、タイ、マレーシアなどのアジア諸国との連携によって承認に至ったものであること、②今回の会議は、本来タイが正式メンバーとして参加している「SC5」のみの予定だったが、TISIの理解と好意により、関連規格を担当する「SC4/WG10」もそのスケジュールに組み込んでいただいたこと—である。会議にはTISI関係者もオブザーバーとして出席、AD関連規格作成について今後も引き続き協力する旨の約束を得ることができた。

今回、初審議を無事に終えることができたのは、関係各位のご協力と会議参加者による活発な意見交換によるところが大きいと感じている。今回の審議で明らかになった課題については、各国の専門家が協力して取り組むことで、AD関連規格にふさわしい内容を盛り込むことができるものと期待している。

なお、次回の審議は、来年3月上旬に中国で行われる予定である。

みずのゆきこ  
(水野由紀子)

## 「DPI世界会議」、韓国で開催 共用品推進機構が日本のAD製品を展示

「私たちの権利、私たちの条約、そしてすべての人のために」をテーマに、「第7回DPI世界会議韓国大会」がソウル郊外に建設された国際展示場「KINTEX」で、9月5～8日の4日間にわたり開催された。大会期間中は、基調講演や各種分科会、常設展示などが催され、71の国と地域から2700人ほどの人々が参加した。

「DPI」とは“Disabled Peoples' International”の略称で、日本語では「障害者インターナショナル」と訳す。1981年の国際障害者年を機に、身体、知的、精神など、障害の種別を超えて自らの声をもって活動する障害当事者団体として設立され、現在では世界150カ国以上の団体が加盟している。

### 71カ国・地域から2700人が参加

昨年12月に「障害者権利条約」が採択されてから初めて開催される世界会議でもあり、分科会も権利条約の条文ごとに構成され、数名の講演者がプレゼンテーションを行った。例えば、「第6条 障害のある女性」「第9条 アクセシビリティ」「第27条 労働および雇用」など、同時並行で6つのテーマが設定され、来場者は34ある分科会の中から聞きたいテーマを選んで参加していた。

共用品推進機構はDPI日本会議のご厚意に

より、3×2.5mの常設展示ブースを3日間にわたり設置させていただいた。アクセシブルデザイン(AD)製品の中でも、シャンプー容器や点字付きの缶ビール、牛乳パックなど、日本工業規格(JIS)を採用した製品を展示し、日本のJISや、日中韓による国際標準化機構(ISO)への共同提案を紹介した。ISOでの規格作りの際に、障害のある人や高齢者のニーズや意見を取り入れていく仕組みを作ろうとしている日本の動きについても、パネルなどでその内容を紹介した。

来場者からは、「牛乳パックやシャンプーへの配慮はとても興味深い」「すべての製品がADになれば、多くの人々が幸せになれると思う」「自分の国でもAD製品が普及してほしい」などの意見が聞かれた。ISOへの取り組みに関しては、「規格作りに障害のある人の意見を取り入れることは難しいと思うが、是非実現してほしい」「国際的なレベルでの規格や協力は、絶対に必要だと思う」など、多くの貴重な意見や感想をいただいた。

世界各国から集まった障害のある方たちから、こうした生の声を聞ける機会を得られたことは、アクセシブルデザインの規格化・共通化を推進する機構にとって非常に有意義であり、また、改めてその重責を認識させられる大会参加となった。  
(米井健治郎)



■DPI世界大会の出展ブース(左)と海外の人々に共用品を紹介した機構のブース(右2点)

# 共用品推進機構で「インターンシップ」 夏休みに女子大生と高校生が「就業体験」

今年夏、(財)共用品推進機構は学生たちの「就業体験研修」を実施した。参加したのは大学生、高校生各2名。夏休みの7～8月に、大学生が2週間、高校生が1週間、それぞれ機構事務局に通い、職員の指導を受けながら、企業にヒアリング調査に出向くなど、汗を流して実社会の片鱗を体験した。

参加したのは、大学生が跡見学園女子大学2年生の吉田亜沙美さん、鹿山かの子さん。高校生が「東京未来塾」に参加している都立高校3年生の大窪結香さん、郡山遥さん。同塾は、東京都教育委員会が21世紀の東京の創造的発展を担う人間の育成をめざした都独自

の教育改革の取り組みの1つ。首都大学東京や都立高校と連携して、社会貢献の志や課題解決の実践的な力を備え、日本の将来を担う改革型リーダーとしての資質を持つ人材を育成するもので、対象は高校3年生。

機構はこれまでも現役学生のインターンシップを受け入れてきたが、今回もこれまで共用品を知らなかった若者が就業体験を通じて、共用品の工夫を知ると共に、社会に対して、また自分のやるべきことについて気づいていく姿を目の当たりにでき、私たち職員にも貴重な体験となった。私たち大人が「何を伝えていかなければならないか」を改めて考え

## 『就業体験を通じて』

大窪結香  
郡山 遥

「共用品推進機構ってどんなところだろう」体験学習先が決まったとき、そう思った。しかし、体験をしていく中で、この機関が社会にとって非常に重要なものであることに気づいた。

体験内容は、一度学校で教材として使われた共用品が破損していないかの確認や、共用品を広げるためのプレゼンテーション、「大活字カフェ」という弱視や盲目の方のための商品を扱っているお店の見学などであった。

点字が打てるタイプライターや弱視の方のための黒地に白い文字で書かれた白黒反転定規など、あらゆる共用品に触れることができた5日間だった。1つひとつの共用品の工夫に驚くとともに、背景にあるそれらを考えた人の思いやりが感じられた。上部に凹みがある牛乳パックや、「5」のボタンに凸点があ

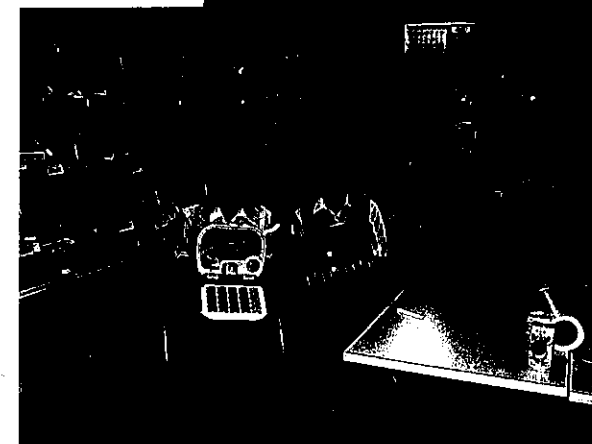
る電話など、一見すると共用品と気づかないものも共用品であることを知った。そして、あらゆる配慮によって、私たちの生活は便利になっているということに気づいた。

しかし、そのような配慮があるものだけでは、誰もが住みよい社会にならないことも感じた。体験の中で見たビデオや本などから、ものや設備があっても、それを使うために手助けする人が必要であり、ものだけでは補えない部分もたくさんあることに気づいた。そして、バリアフリー社会は、不便さを感じる人への思いやりがあってこそ実現するものだった。

今後、日常生活の中でそのような思いやりを行動で示すとともに、その大切さを他人にも伝えていきたい。共用品推進機構は、このような体験学習や教育機関での活動というソフト面と共用品の標準化などのハード面でバリアフリー社会実現に向けて貢献していると知って、社会にとってなくてはならない存在であると思った。

■インターンシップに参加した跡見女子大の吉田亜沙美さん(右)と鹿山かの子さん(左)

■機構事務局の展示室で共用品に触れる大窪結香さん(左)と郡山遥さん(右)



せられる機会となったように思う。

大学生も、高校生もそれぞれ最終日には、期間中に勉強した成果についてのプレゼンテーションを行い、充実した就業体験を締めくくった。皆さん、本当にご苦労さまでした！

ここでは、大学生と高校生それぞれに「就業体験で得たこと」を作文にまとめてもらったので、ご紹介したいと思います。(森川美和)

## 『インターンシップを通じて』

吉田亜沙美  
鹿山かの子

私達はこの共用品推進機構でのインターンシップで様々な多くのことを学びました。

インターンシップに行く前は、「共用品」という言葉をあまり耳にしたことがなかったので、馴染みのないものでした。

最初は立っているだけで緊張してしまい、挨拶と自己紹介もままならず、この先のことを考えると大丈夫なのか不安になりました。

しかし、機構のみなさんが優しく指導をしてくれたおかげで緊張もほぐれ、だんだん慣れてきました。

私達は包装容器と凸表示に分かれて、色々と調べました。

機構や共用品についての説明を聞き、そして実物を見ると、携帯電話の「5」のところの凸点、シャンプー容器の横にあるギザギザなど、今までよく知らずに使っていた共用品が身の回りにあったことに気づかされました。

ほかにもたくさんありますが、いつも身近で使っている物が、障害者・高齢者に対して

配慮していることは、共用品推進機構に来なければわからないことでした。

資料を見て調べたり、いくつかの企業を訪問してお話を聞いたり、知れば知るほど興味が出てきて楽しくなっていく、最終日のプレゼンテーションに向けて、仕上げるのは大変でしたが、あっという間に2週間が過ぎてしまいました。

インターンシップが終わってからは、お店に入って商品を見るときも、いつもと違った視点で見られるようになり、「ここは配慮されているのだろうか」と考えるようになりました。

また、いくつかの企業訪問を経験できたことも、私達にとって貴重な体験になりました。メモの取り方、質問の仕方、訪問先の方への接し方など、大学では知ることができない体験は、緊張したのと同時に社会に出る前に知っておいてよかったことばかりです。

インターンシップに行く前の私達と同様に、こういう配慮に気づいていない人がたくさんいるので、もっと情報を発信していきたいです。これからもっと意識して色々なものを見て、発見ができたらいいいと思いました。

## 「第34回国際福祉機器展(HCR2007)」ルポ 新技術駆使し、“高品位バリアフリー”を追求 大手各社は「トータルソリューション」競う

「第34回国際福祉機器展(HCR2007)」が10月3～5日の3日間、東京・有明の東京ビッグサイトで開催された。写真。入場者数は12万8128人で前年に比べ1万人強減少したが、福祉機器やアクセシブルデザイン(AD)製品の今後を占う新たな潮流を見ることができた。1つが、より高いレベルで消費者の利便性の実現を目指した「高品位バリアフリー」の胎動。もう1つが、ライフスタイル全般の安全性や快適性を実現する「トータルソリューション」の追求だ。

「高品位バリアフリー」と名付けたのは、見過ごされがちだった“すき間ニーズ”や、手つかずだった“わがままニーズ”など、より高い水準での不便さ解消を目指す動きだ。

例えば、移動機器関連では、ヤマハ発動機がどんな手動車いすにも後から装着できる電動車いすユニットを開発。別の電動車いす・カートを購入しなくとも、1台で手動・電動を使い分けることができる新しい車いすライフを提案した。トヨタ自動車が発売した福祉車両「ポルテ」のウェルドライブ仕様車は、運転席がそのまま電動車いすになる新機構を採用、車いすから運転席への移乗の負担を軽減した。また、日立製作所は、数段しかない狭くて小さな階段にも取り付けられる小型の段差解消機(リフト)を開発し、公共施設などへの売り込みを図っていた。

こうした動きの背景には、福祉機器・AD製品市場が成熟化し、バリアフリー需要が一巡する中で、メーカー各社が消費者ニーズの深掘りを進めていること、さらには、そこで浮かび上がった潜在ニーズに応えるAD関連



技術の発展・進化がありそうだ。

同様の動きは、コミュニケーション支援機器の分野でも見られた。音声ガイド・認識技術やGUI(グラフィック・ユーザー・インタフェース)など、最新のICT(情報通信技術)を駆使して、視覚・聴覚障害者にも使いやすい機器・ソフトを開発する動きが、特に技術開発機関や地方自治体の共同ブースに独自開発技術を展示する中小・ベンチャー企業の間で目立った。内容はまだ百花繚乱で、どれが生き残るか判断しかねるが、この分野はやはり今後の最有力市場と言えよう。

他方、大手企業では従来の個別分野ごとの課題解決を一步進め、ライフスタイル全体を快適に改善しようという「トータルソリューション」の提案が目についた。松下電器産業、TOTO、INAXなど家電・住設メーカー、介護機器レンタル大手各社などのブースにこの傾向が顕著。トヨタグループ各社も共同でトータルソリューションを訴えていた。

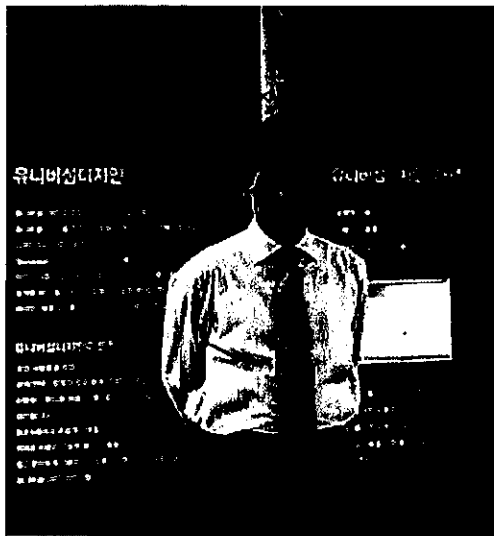
HCRはここ数年、入場者の漸減傾向が続く、介護保険導入で福祉市場が脚光を浴びた2000年前後の熱気は薄れてきたものの、団塊世代の高齢化とともに現出する超高齢社会に向け、企業各社の優勝劣敗を占う第2フェーズの潮流が明確に感じ取れる出展内容だった。

## ＜特別インタビュー＞

### 李鎬崇・慶星大学校UD研究センター長(釜山)に聞く 韓国で唯一のUD専門機関、“高齢親和産業”を育成

アクセシブルデザイン(AD)の普及に向けた動きがグローバル規模で加速している。わが国と同様に急速な高齢化が進むお隣・韓国では、「高齢親和産業」の育成に向けて、国内規格の整備など産官学一体となった取り組みが始まっている。その旗振り役を担っているのが、2004年に釜山の慶星大学校に設立された「ユニバーサルデザイン・リサーチ・センター(UDRC)」だ。(財)共用品推進機構は同センターと友好的な関係を築き、学生によるUDデザインコンペの開催などで協力している(本誌第40、46号参照)。そこで、李鎬崇センター長にインタビューし、UDRCの事業内容や韓国におけるADの現状などについて語ってもらった。なお、インタビューは書面を通じて行い、その内容を再構成した。

(星川安之、高嶋健夫)



#### 韓国で唯一のUD専門機関

—李先生がセンター長をされている「UDRC」は、どのような経緯で設立されたのですか？

李 韓国政府内の産業資源部が推進する「デザインインフラ構築事業」の一環として、2004年に韓国・釜山にある私どもの慶星大学校内に設立されました。

—UDRCの特色は？

李 韓国で最初の、そして唯一のユニバーサルデザイン(UD)に関する専門機関です。ご案内のように、韓国は現在、世界で最も早いスピードで人口の高齢化が進んでいますが、

UDRCはそうした高齢社会に向けた新たな産業の育成、社会基盤の整備といった施策に先兵となって貢献する役割を担っています。

—UDRCの事業を教えてください。

李 主な施設としては、デザイン研究所である「Design Creation Lab」、消費者モニターを行う「Usability Test」、「体験展示館」、「企業相談室」などがあります。

主に企業を対象に、商品開発のコンサルティング、消費者に関する情報、UDに関するガイドラインなどのさまざまな活動を通じて、UDに関する知識・情報の普及に努めています。

#### ■李 鎬崇(Hosoong, Lee)氏

1999年、韓国の京畿大学を卒業。2003年、愛知県立芸術大学美術大学院修士課程を修了。07年、建国大学大学院博士課程を修了。現代精工技術研究所での車両デザイン業務を経て、現在、慶星大学校デジタルデザイン専門大学院副教授、ならびにUDRCセンター長を兼任。その他、釜山市の高齢親和産業のワーキンググループのメンバー、

グッドデザイン(GD)マークの審査委員としても活躍しているほか、韓国政府が推進する公共環境の施設のUD化促進事業にも参与として参加している。

#### ＜連絡先＞

Universal Design Research Center  
Kyungsung University, 314-79 Daeyeon3-dong,  
Nam-gu, Busan, Korea  
TEL:+82-51-620-4317 FAX:+82-51-607-5603  
E-mail: lhs@ks.ac.kr



■韓国・慶星大学校UDRCの諸施設

— 韓国の消費者、一般社会のADに対する関心はどんな状況でしょうか？

李 研究センターを運営しながら最も困難なことは、やはり一般市民はもちろん、産業界や政府レベルでのUDに関する認識の低さと言えます。韓国では国レベルでデザイン振興を担当しているのは政府の産業資源部ですが、主に企業と市場に対する短期成果を中心に評価するのみで、もっと基礎研究に積極的に取り組むべきだと思います。

とはいえ、当センターによる認識調査の結果を見ると、デザイン企業の多くが基礎研究とその成果をモノ作りに取り入れる必要性があると答えているほか、センターにあるUD体験施設や海外から集めた製品を使って、その大事さと効用性を認めてくれました。

— 企業の取り組みはどの程度進んでいるのでしょうか？

李 最近、いくつかの大手企業からUD情報を含む講演依頼やUDコンセプト技術に関する相談、センターへの見学申し込みなどが増えていますが、中小企業レベルではほんの一部、企画力のある経営者の方々が訪ねてくる程度です。主に大手企業での話ですが、IT系では、携帯電話のインタフェースを中心に使用性を高める努力がかなり進んでいるようです。国家的な規模での研究はされていなくても、民間企業レベルでは必要性を感じ、独自の方法を模索している現実があります。

— 韓国の共用品の市場規模は？

李 韓国では、今のところUD製品の市場規模について明確な数字はありませんが、高齢親和産業（シルバー用品市場）を潜在的なUD市場と言うことはあります。しかし、韓国政府が考えている高齢親和産業は健康食品から金融や教育までの幅広い分野が含まれており、市場規模を断定する資料に使うのは難しい状況です。

#### ■国家政策としてのUD推進が必要

— UDRCの設立後、韓国でのUDに関する動きに変化は出ていますか？

李 当センターでは、地域のデザイン企業や産業界、学校などへの使用性評価ルーム、計測機器、モデリング装備などの提供を優先事業として行っています。つまり、UDの専門デザインセンターとしてのハードを中心としたインフラの構築です。

もちろん、ハード面だけで、UDの特性化が完成されるわけではありませんので、できるだけ使用者情報や理論資料、コンペ、講義なども支援してきました。特に大学生を対象にしたコンペは、すでに全国規模で知られたイベントになっており、優秀な提案は企業UD製品開発支援事業のリソースとして活用しようとして予定しています。

— 今後、UDの普及に必要なことは？

李 何よりも国家政策としてUDを取り入れていくための青写真とその推進体がほしい。

## ■共用品ネット活動報告会「わくワークショップ2007」 12月15日(土)に、東京・竹橋の毎日ホールで開催

(財)共用品推進機構個人賛助会員の会「共用品ネット」(代表・児山啓一氏)は12月15日(土)午後1～5時、東京・竹橋の毎日ホールで、恒例の活動報告会「わくワークショップ2007」(吉村政昭・実行委員長)を開催する。

今年は、「マネー&カード」「使いやすいパッケージ」「気配りアフリー」「ウルトラニーズ発掘」「ミュージアムのUD」の各プロジェクトと将来の共用品の種を探す「シーズタンク」によるパネル展示と活動発表が行われる。

また、共用品の紹介と実物展示、手話コーラス、国際アビリンピック(静岡、11月)のパネル展示、関西、名古屋、九州の各関連団体の活動を紹介するパネル展示など、さまざまな角度から共用品を体験学習できる楽しいイベントを企画している。

会場の毎日ホールは、東京メトロ東西線「竹橋」駅下車、出口1bから地下1階の同ホールに直接入れる。

よしむらまさあき たかしまたけお  
(吉村政昭、高嶋健夫)

■問い合わせ先: info@kyoyohin-net.com

そのためにはまず、政府側の認識が変わるべきだと思います。

最近、ある地方自治体の方がUDについて大変興味を持ち、当センターまで積極的に問い合わせてきました。その自治体ではUDを戦略的に取り入れることを決め、どうやって始めるかを知りたくて訪ねてきたわけです。ところが、やはりUDを理解してもらうのが難しく、あきらめるか、悩んでいるそうです。

私は、UDを単に企業の支援デザインとか、1つのテーマ技術と見るより、「共に暮らしていける生活文化」として受け入れてほしいと考えています。

#### ■UDベースの社会システム構築に向けて

— ISOでは、日中韓3カ国の共同提案によるADの国際規格作りが動き出しました。

李 驚くべきことに、当センターで行った認識調査の結果によると、韓国では多くのデザイナーたちが、例えば「人間中心設計」とか「ガイド71」など、UDにかかわる参照標準について、その目的や存在をほとんど知らないのです。今回の国際規格作りも、現場のデザイナーは排除され、単に技術標準関係の

公務員レベルで取り扱うという印象です。

このような現状の背景には、いろんな理由をあげられますが、まず、デザイン教育の問題と標準政策に対する政府側とデザイン業界の関心の問題と言えます。これに関しては、言いたいことが山ほどありますが、この程度でやめたほうがよいと思いますね(笑い)。

当センターでは今年、韓国初だろうと思いますが、「慶星大学校ユニバーサルデザイン研究センター作成評価指標」という標準提案をしました。ガイドラインとも言えますが、標準規格で要求される基本的な項目を入れたのが特徴かもしれません。

— UDRCの今後の「計画」と、将来に向けての「夢」をお聞かせください。

李 今年、企業UD製品開発支援事業を中心に展開します。企業がUDを取り入れ、自社なりのUD方法論を見つけてもらうのが目的です。将来的には、UDをベースにした社会システムという視点で、公共デザイン分野まで広げていきたい。例えば、地球温暖化の影響による社会現象とライフスタイルの変化などに伴うデザインの役割探索は、未来研究として意味のあることだと思います。

## <この業界・この団体>(社福)全日本手をつなぐ育成会 知的障害のある人の「当事者参加」を推進

47都道府県と政令指定都市にある「育成会」の連合体として、「知的な障害」のある人と家族のための政策提言、権利擁護、本人活動推進、情報提供などに取り組んでいる。末端会員は約30万人で、このうち親・保護者は約13万人。また、本人が活動する「本人の会」は全国に約240グループを数える。

1990年代以降、特にここ数年で力を入れているのが「当事者参加」の実現。そのための第一歩として、「わかりやすい情報提供」を推進している。機関誌『手をつなぐ』のほか、「みんながわかる新聞」を謳った当事者向けの新聞『ステージ』（毎日新聞が制作に協力）、さらには『自立生活ハンドブック』シリーズなどの多彩な出版物を刊行している。

『自立生活ハンドブック』は健康、料理、就労、法律、性まで幅広いテーマを取り上げていて、現在16点を数える。いずれも、平易な表現を用いたり、漢字にはルビを振ったり、大きな活字で印刷したりするなど、できるだけわかりやすい編集を心掛けている。例えば、料理の本である『ほなべてい』では、21種類のレシピの手順をいっさい言葉を用いず、カラー写真だけで紹介している。

### 共に理解し合える「会議のあり方」とは

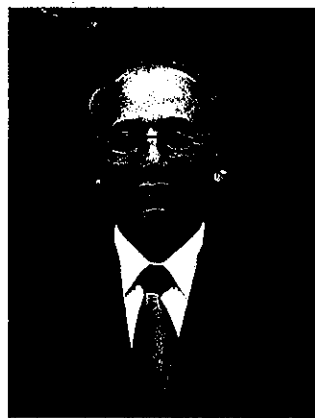
また、政策決定プロセスへの当事者参加をめざし、本人活動推進事業の中で「会議参加



●育成会では「わかりやすい情報提供」を目指してさまざまな出版物を刊行している。

■(社福)全日本手をつなぐ育成会  
設立 1952年7月(95年に現名称に)  
理事長 副島宏克(そえじま・ひろかつ)氏  
事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋2-16-1  
全国たばこセンタービル8F  
問い合わせ先 TEL:03-3431-0668  
ホームページ <http://www.ikuseikai-japan.jp/>

支援」の研究と普及にも取り組んでいる。当事者と行政当局との懇談会を継続開催したり、政策決定会議への本人の派遣を行っているが、育成会によると、いくつかの課題がある。例えば、支援者の同席、事前の十分な情報提供、本人の発言など会議内容のフィードバックといったキメ細やかなバックアップが必要になる。そうした対策が講じられれば、「知的な障害のある人も誰とでもパートナーシップが組める」(岡庭千泰さん)と、理解と支援の広がりを見せている。(高嶋健夫)



### <アクセシブルデザインの普及に向けて一言> 知的障害のある人と社会との「共創システム」の確立を

副島宏克・(社福)全日本手をつなぐ育成会理事長  
障害者の不便さやニーズを聞くことで、誰にとっても使いやすい共用品が増えました。育成会でも共用品推進機構と連携して、商品モニタリングを始めていますが、共用品は知的障害のある人にも評判の良いモノが多いようです。ただ、知的障害のある人の声はまだ十分に企業や産業界に届いているとは言えません。

知的障害のある人のニーズは高齢者のニーズと重なり合う部分があり、「思うように動けなくて、辛いだろうね」などと高齢者の気持ちを理解し、代弁されたりもします。不便さを共感できるんです。知的障害のある人が社会の各層と一緒にできることはたくさんあるはず。みんな協力し合って、そんな「共創システム」を作っていきたいですね。(談)

## あの名、この顔、出会いと感謝の28年 『視覚障害人名事典』刊行に思う

☆…『視覚障害人名事典』が届いた。「視覚障害」に関わる700人が紹介されたこの本は、盲人の自立更生と福祉増進をめざして昭和21年に設立された名古屋ライトハウスが、創立60周年を記念して発行したもの。福祉、教育、医療、文芸、音楽、ボランティア、宗教、機器開発、マスコミ、医学、スポーツ、政治、法律と分野ごとに、視覚障害のない人も含めて紹介されている。

中には、私がその昔、目の不自由な子供たちのおもちゃを作るために教を請うた人たち、試作品で遊んでもらった当時子供だった人ら、旧知の人々も多数名を連ねており、感慨深く読ませていただいた。

☆…この事典にも登場し、私の仕事に多大な影響を与えてくださった3人の方々が今年度、それぞれ歴史ある賞を受賞され、3人を同時に祝う会が10月30日に東京で開催された。

1人目は、日本ライトハウス理事長で日本点字委員会会長の木塚泰弘

さん。第25回鳥居賞、第11回伊都賞を受賞された。木塚先生は久我山盲学校の教師を務めた後、横須賀市久里浜にある国立特殊教育研究所で長年、盲教育の研究に従事された。

28年前、私が最初に教えていただいたのが先生だった。右も左もわからない若造の私に、「見えないとはどういうことか?」から「見えない子供が必要とするおもちゃの条件とは?」まで、丁寧にわかりやすく教授して下さった。その後、共用品推進機構でも、発足時から理事としてご尽力いただいている。

第11回伊都賞を受賞された酒井久江さんは、長野県諏訪市の銀行員だった時に「点字」と出会い、その後、盲老人ホーム「聖明園」に転職。40年近くにわたり「盲老人」の福祉のために尽くされた。酒井さんとも二十数年前にお会いし、多くのことを教えていただいた。

もうおひとは、第44回点字毎日文化賞を受賞した富田清邦さん。地



唄・箏曲の名人で、平曲伝承者の土居崎正富検校、人間国宝の初代・富山清琴氏に師事。国内外で精力的に演奏活動を続け、40歳で文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、46歳で文化庁芸術祭賞を受賞するなど、その功績は高く評価されている。

私が知る富田さんは「見えない人と見える人が一緒にゲームを楽しむ会」でいつも真剣にゲームに挑み、その後の食事会では一転、周囲を笑わせる話術の達人。そんな気さくなお人柄が強く印象に残っている。

☆…これら3人の受賞者をはじめ、『視覚障害人名事典』に収録された多くの方々に、共用品も、機構も、私自身も、多くのお知恵と力をいただいていることを改めて実感する。

ただ、感謝したい人は、事典に掲載されている人数の少なくとも10倍はいて、次々と名前やお顔が思い浮かぶ。有り難いことである。(★)

## 共用品通信

### 【トピックス】

○花王、WEB版『暮らしのボイスガイド2007年版』を配信開始  
従来のDAISY版CDのコンテンツを、同社ホームページ(<http://www.kao.co.jp/corp/citizenship/index.html>)に公開。

### 【委員会】

○第2回アクセシブルデザイン技術標準化開発委員会(9月25日)  
○第2回アクセシブルデザイン戦略WG(10月4日)  
○第2回ISO審議サポートWG(10月4日)  
○第1回交通機関におけるコミュニケーション支援ボード作成委員会(10月12日)  
○第2回アクセシブルデザイン推進協議会(ADC)幹事会(10月16日)  
○第2回アクセシブルデザインミーティングWG(10月31日)

### 【講義・講演】

○平成19年度消費生活コンサルト養成講座(10月2日、松井・星川)  
主催は財団法人日本消費者協会。テーマは「より多くの人が

### 使いやすいモノ・サービス」。

○「2007年度国際標準化入門研修」(10月10日、金丸)  
○共用品授業(10月18日)  
昭島市立拝島第三小学校で、タカラトミー・高橋玲子さんと森川が授業を行った。  
○「ASEAN(アセアン)国際標準化開発研修」(10月23日、金丸)  
○第30回総合リハビリテーション研究大会(10月20日、星川)  
「最先端の取り組みを繋ぐ」「ユニバーサルデザインを、アクセシブルデザインで」をテーマに講演。

### <読者の皆様へのお願い>

「共用品通信 情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。

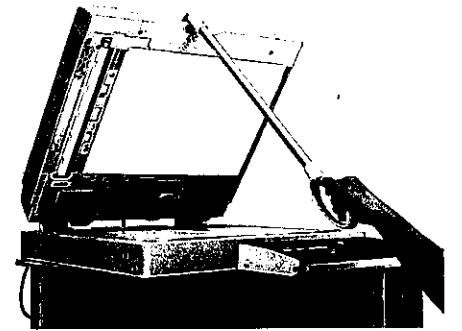
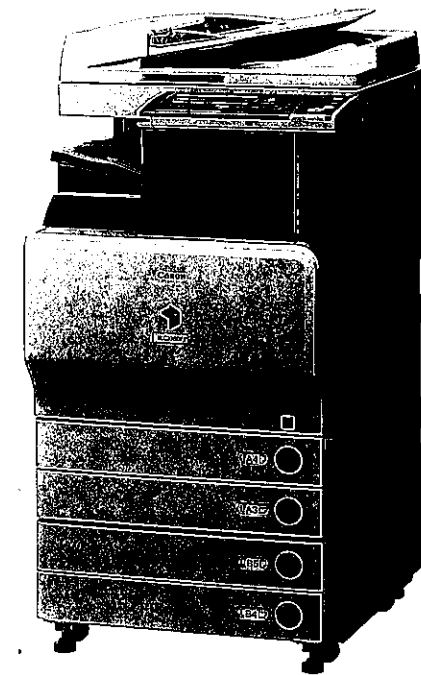


わが社の  
エース

# キヤノン(株) 複合機「imageRUNNER」シリーズ

音声による“ガイド&操作”を実現

■キヤノン「iR C3380F」  
 ▼発売時期：2006年9月  
 ▼本体寸法：565×755×880mm  
 ▼連続複写速度：カラー毎分30枚、  
 モノクロ同33枚（A4ヨコ）  
 ▼希望小売価格：176万円  
 ▼問い合わせ先：キヤノンお客様  
 相談センター（TEL：050-555-  
 90051）  
 ▼ホームページ  
<http://www.canon.jp/color-ir/>



## 「専用ハンドル」も開発

キヤノンの「カラー・イメージランナー（Color imageRUNNER）」シリーズは、コピー、プリンター、スキャナー、ファクスを装備したオフィス用カラー複合機で、ここで紹介する「iR C3380F」はその普及モデル。

「フロントアクセス」を実現したコンパクトな設計に加え、「思いのままに、意のままに」の謳い文句の通り、同社が追求するユニバーサルデザイン（UD）の最新の成果をふんだんに盛り込み、誰にとっても使いやすい操作性を追

求している。

売り物の1つが「かんたんナビ」機能。使い方がわからない時でもこのボタンを押せば、マニュアルを開かなくても、液晶画面に操作方法を表示してくれる。薄型テレビなど最近の家電製品と同じ発想の親切設計だ。

また、Webブラウザを搭載しているので、いちいち自分の席に戻ってパソコンを操作しなくても、直接、社内のイントラネットに接続して必要な資料などを出力することができる。

障害のある人へのアクセシビリティ機能も充実。特にオプショ

ンながら「音声操作キット」を装着すれば、基本操作を音声でガイドしてもらえるほか、専用マイクに呼び掛ける形で声で操作することも可能。認識水準はかなり高く、誰の声でも高い精度で認識するという。また、日本語のほか、英語にも対応している。

最先端技術ばかりでない。“ローテク”の工夫もある。車いす使用者でもコピー機のカバーを持ち上げられるように、専用のアクセスハンドル（別売り）を用意しているのだ。使う人の気持ちを考えた、見事な“気配り用具”だと感心した。  
 （高嶋健夫）

アクセシブルデザインの総合情報誌

## インクル 第51号

2007（平成19）年11月25日発行  
 "Incl."vol.8 no.51  
 ©The Accessible Design Foundation of Japan  
 (The Kyoyo-Hin Foundation), 2007  
 隔月刊、奇数月に発行  
 一般頒価 1部1000円  
 (但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構  
 郵便番号101-0064  
 東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F  
 電話：03-5280-0020  
 ファクス：03-5280-2373  
 Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org  
 ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子  
 事務局 星川 安之  
 森川 美和  
 金丸 淳子  
 水野由紀子  
 松井 亨倫  
 米井健治郎  
 田中由紀子  
 編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 大窪 結香  
 (五十音順) 鹿山かの子  
 久米井靖裕  
 郡山 遙  
 山本百合子  
 吉田亜沙美  
 吉村 政昭  
 和田留真理

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)  
 サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。